魔法学校の落ちこぼれ 6

ALPHA LIGHT

梨香
Rika

アルファライト文庫

主な登場人物
Main Characters
ウィニー
伝説の魔法使いアシュレイが遺した卵から生まれた風の魔竜。フィンに育てられる。
グレンジャー
シラス王国の海を護る騎士団の団長。言動は軽薄だが切れ者。
マドリン
南の島に暮らす呪術師の孫。海賊に捕まっていたところを、シラス王国軍に救出される。
ゲーリック
カザフ王国の怪しい魔法使い。禁じられた呪に手を出し、精神を蝕まれている。
ファビアン
フィンの村を治める領主の嫡男。騎士を志し努力を重ねる。魔法学校では自治会長。
ルーベンス
シラス王国唯一の上級魔法使い。普段は魔法学校を見下ろす塔で暮らし、たまに吟遊詩人に扮して各地を放浪する。
フィン
本編の主人公。辺境の貧しい農村に住むチビ少年。魔法学校で少しずつ才能を開花させる。
フローレンス
ルーベンスの一族の娘で、魔法学校初等科の生徒。フィンに思いを寄せている。

一　戦火の祖国

大陸の東南に位置するシラス王国は、領土は大きくないが良港を有している。

三百年前、その良港を欲する連合王国に攻められ、存亡の危機に立たされた。そこにアシュレイという偉大な魔法使いが現れ、連合王国を退け、国境線に防衛魔法を掛けた後、二度と侵略されないようにと、弟子達にその維持を託したのである。

現在のシラス王国の守護魔法使いルーベンスは、アシュレイの最後の弟子であるトラビス師から防衛魔法を引き継いで、百年以上もシラス王国の平和を護ってきた。しかし、ついにその平和が崩された！　強大な隣国カザフ王国に攻め込まれたのだ。

丁度カザフ王国の王都ロイマールに潜入していたルーベンスとその弟子フィンは、戦争勃発の知らせに、急いで帰国することになった。

二人は今、ある極秘情報を掴んでいた。カザフ王国のフレデリック王は病に倒れ、手下の魔法使いゲーリックの掛けた呪によって、意識のないまま生かされているという。呪を解くべく、王宮に侵入してゲーリックに単身戦いを挑んだフィン。しかし、以前とは比べ

物にならない魔力で軽くいなされてしまう。その敗北による屈辱はフィンの心に影を落としたが、今はそれどころではなかった。

「皆、無事でいて！」

胸がチリチリと痛む。

戦争勃発というニュースは、王都ロイマールにも衝撃を与えた。どうやら第三王子カイルが病床に伏したフレデリック王の後継者に名乗り出て、王の承認なしにシラス王国に戦争を仕掛けたらしい。その噂はあっという間に広まった。

イザベラ王妃が産んだ第四王子オットーを推す勢力や、野心家の第一王子ルードの支持者などの小競り合いがロイマールの闇をより濃くしていた。

戒厳令が布かれたロイマールから、バルト王国の馬喰に紛れて脱出したフィンとルーベンスは、一刻も早く戦争中の祖国に帰ろうと、カザフ王国の東海岸を目指した。

フィンは、風の魔竜ウィニーの体の一部だった孵角をグッと握りしめてその名を呼び続け、シラス王国の西で待機していたウィニーと、どうにか連絡を取った。

戦争が始まってから四日目の夜明け、カザフ王国の海岸でウィニーに飛び乗ったフィンとルーベンスは、一路シラス王国を目指す。

『ウィニー！　急いで！』

シラス王国から夜通し飛んできてくれたウィニーが疲れているのはわかっているが、フィンは一刻も早く帰国したい気持ちから、つい急かしてしまう。

魔法学校の友達や同級生、そして卒業して騎士団付きの魔法使いになった先輩達の安否が気になっていたのだ。

「フィン、ウィニーに無理をさせないように……」

そう注意したルーベンスも、自分が百年以上も守護してきた祖国がカザフ王国に侵略されていると思うと、いても立ってもいられない。

『フィン、私なら大丈夫！　ファビアンも、早くルーベンスを連れて帰ってくれと頼んでいたよ』

風の魔法体系のウィニーは、羽根の力だけで飛んでいるのではない。フィンには風が洪水のように後ろに流れていく様子が見えた。

二人と一頭は、シラス王国に向かってぐんぐんと進んでいく。

『ありがとう！　でも、本当に無理しないでね』

かなりの距離を飛び、少し気持ちに余裕が出てきたフィンは、ウィニーの疲労と共に、昨日も一睡もしていない師匠の体調が気になり出した。

「師匠、どこかで休みましょうか？」

「いや、早く帰国したい！」

フィンだって気持ちは同じだ。しかし、ルーベンスの健康も重要なことである。

『ウィニー、あとどのくらいでシラス王国に着きそう？』

フィンはウィニーに、どの程度まで近づいているのか質問した。まだまだ時間が掛かるようなら、ルーベンスを休ませたいと考えたのだ。

『あと数時間で着くよ。ここからは海の上を飛ぶつもりだから、シラス王国に着くまで休憩はできないよ』

カザフ王国との国境には、三百年前の大戦後にアシュレイが掛けた防衛魔法が高く聳え立っている。それを避けるために、ウィニーは海を回って帰国するのだ。

「そうかぁ、竜にも防衛魔法は通り抜けられないんだね。やっぱり海に防衛魔法がないのが、狙われたな！　師匠、帰国したら、海に防衛魔法を掛けなきゃ！」

ルーベンスは、どの程度の被害が出たのか考え込んでいたが、フィンの言葉に頷く。

「そうじゃ！　バルト王国で習得した水の魔法陣を応用して、防衛魔法を掛けよう」

ウィニーは二人の会話を聞いて、より一層スピードを上げた。フィンと共に育ったウィニーには、シラス王国に多くの友人がいる。彼らを護るためにはフィン達の力が必要なのだと理解していた。

『さぁ、しっかりと掴まっていて！』

ウィニーがかなり和らげてくれていたが、それでもフィンの顔にビュンビュンと風が当たる。目を開けているのも難しいほどの風圧に、フィンはしっかりと鞍を握った。

そのまましばらく飛んでいると、遠くの海上でカザフ王国の戦艦とシラス王国の戦艦が、交戦しているのが見えた。

『ウィニー、あそこに近づいて！』

『わかった！』

猛スピードで飛んでいたウィニーが、急に速度を落とし、海面の近くへ降りていく。物思いに耽っていたルーベンスは、突然のことに驚いた。

「フィン、何をするつもりだ！」

そう言いながらも前方に目を向け、交戦中の戦艦に気づく。

「行きがけの駄賃という訳か！　良かろう！」

守護魔法使いの侵略者への怒りに火がついた。戦艦に気づいたのはフィンの方が早かったが、ルーベンスがすぐさま炎の矢を放ち、カザフ王国の戦艦の帆を燃え上がらせる。

「師匠……俺の方が先に見つけたのに……さぁ、ウィニー、シラス王国に帰ろう！」

ウィニーはまたスピードを上げ、戦艦の上を通り過ぎていく。

シラス王国の戦艦から、上空のウィニーに向けて歓声が上がった。

二　守護魔法使いの帰還

アシュレイがカザフ王国との国境線に掛けた防衛魔法を避けて、海からシラス王国に帰国したルーベンスとフィンは、取り敢えず被害状況を調べたいと考えた。

『ウィニー、ウェストン騎士団はミンスにいるの？』

カザフ王国との国境線を守っているウェストン騎士団の普段の駐屯地は、ロイマールへの街道がある内陸のミンスだ。しかし、今回の侵略は海からだったので、駐屯地を移動している可能性もある。

『ミンスにもいるけど、海の近くのベントレーに結構な数が移動したよ。ファビアンとパックも一緒だね』

ベントレーはその名の通り、パックの実家であるベントレー一族の治める地だ。そこにウェストン騎士団が駐屯していると聞いて、フィンは少し安心した。

パックの一族には火の魔法体系を得意とする魔法使いが多いため戦力はあるが、それでも海に近いのでずっと心配していたのだ。ウェストン騎士団がいるなら、攻撃を受けても撃退できるだろう。

『じゃあ、ベントレーに行って！』

ルーベンスも早くウェストン騎士団と合流し、被害状況や、カザフ王国の侵略がどの程度なのか知りたかったので無言で頷いた。

ウィニーとベントレーへ向かう間、フィンとルーベンスはカザフ王国の侵略の爪痕を空からいくつも目にした。本来なら黄金に色づき始めた小麦畑が広がっているはずの大地が、黒く焼け焦げている。

「なんて奴らだ！　畑に火をつけるだなんて！」

農家出身のフィンには、一年の収穫が無に帰した農民達の悲しみと苦労が痛いほどわかる。勿論、守護魔法使いのルーベンスも怒りの炎を目に灯していた。

「フィン、侵略されるとはどういうことなのか、心に留めておきなさい。そして、二度と許してはいけないのだ」

空から見えたのは焼けた畑や家などだが、そこには人が住んでいたのだ。人間だけが無事で済まされるわけがない。フィンの瞼の裏に、逃げ惑う人々の姿が浮かぶ。そして、その人々に振り下ろされる、カザフ王国の兵士達の刀も。

「絶対に、二度と侵略などさせません！」

フィンがルーベンスの跡を継いで守護魔法使いになる決意を固めたのは、自国の危機を

目の当たりにしたこの時かもしれない。

「そうだ！　そして、今すぐカザフ王国の兵士を我が国から追い出すのだ！」

ウィニーは二人の会話を聞きながら、ベントレーへ急いだ。大好きなフィンが激しい怒りと深い悲しみを抱えているのが、胸に響いたからだ。

ウィニーが向かっているベントレーは、いつもは穏やかな港町だ。だが今はウェストン騎士団が駐屯して、ごった返している。その上、カザフ王国が侵入した土地からの避難民や負傷者なども受け入れているので、領民総出で各々の役目を果たしていた。

領主の次男であるパックも、風の雛竜ゼファーを肩に乗せて雑用に走り回っていた。

「なぁ、パック。ゼファーは竜舎に置いた方が良いんじゃないか？」

あちらこちらに走り回るパックに揺らされ、ゼファーは羽をパタパタとさせてバランスを取っている。見兼ねた兄のサイラスが、それではパックもゼファーも疲れるだろうと注意した。

「そうなんだけど……ゼファーが私から離れるのを嫌がるんだ。きっとチビ竜だけど戦争中だとわかっているんだよ」

夏休み前の試験の時は、ウィニーやグラウニーと一緒に、パックから離れて竜舎で過ごしていた。しかし、カザフ王国が侵略してきてからというもの、一瞬たりともパックの側

を離れようとしなくなったのだ。

「そうか、チビなりにお前のことを心配しているのだろうな。とにかく、少しは休め！」

そう言う兄のサイラスも、今回の突然の侵略で疲れ切っていた。自分の領地を護るだけでなく、ウェストン騎士団の世話も多かったからだ。この数日、二人の目の下から黒いクマが消えない。

「私のことより、サイラス兄さんこそ……でも、カザフ王国の兵士を追い出すまでは、休んだりしている暇は無さそうですよね。……ゼファー？」

ゼファーが、パックの肩の上で突然『きゅるるるるん！』と大きな声で鳴いた。

『ゼファー？　何？』

『ウィニーが来た！　フィンとルーベンスも一緒だ！』

「ルーベンス様が帰国されたのか！　早くレスター団長に知らせなきゃいけないな」

サイラスも守護魔法使いがいないのを不安に思っていたので、パッと顔を明るくさせた。

パックは早速、サイラスに後のことを頼む。

「私はフィンとウィニーを出迎えます。きっとウィニーは疲れているだろうから」

「そうだな！　恐らくフィンは団長達との軍議に参加しなくてはいけないだろう。ファビアンがキャリガン王太子をお連れしたら、すぐに始まるはずだ。ウィニーの世話はお前がしてやりなさい」

ベントレーには、土の魔竜グラウニーとそのパートナーのファビアンもいたが、竜の機動力を生かして連絡係になっている。昨夜、ウィニーが飛び立った後、ファビアンは王都サリヴァンへキャリガン王太子を迎えに行っていた。

「わかっています。竜の面倒は私がきちんと見ますよ」

竜の世話をパックに任せて、サイラスはウェストン騎士団のレスター団長に、ルーベンスの帰国を知らせに走った。

西部沿岸にカザフ王国の侵入を許し、そしてその撃退に苦慮しているレスター団長は、海を護るサザンイーストン騎士団との連携が上手くいっていない現状に苛立っていた。

カザフ王国の部隊への本国からの補給や奇襲を防ぐために、海岸線の封じ込めを求めていたのだが、王都を護るのに手一杯で、そんな余分な艦はないと断られたのだ。

机の上に広げた地図に書き込まれた、カザフ王国の侵入跡と被害状況を眺めて、レスターはどこから対処するべきなのか悩んでいた。

「海岸線の警戒も怠れないし、今、侵入しているカザフ王国の兵も撃退しなくてはならない。周辺の貴族や住民を集めた義勇軍にも協力して欲しいのだが……」

ベントレー近くの貴族は自分の領地を護ることには積極的だが、他の土地に自分の領民で作った義勇軍を貸し出すのを渋っていた。

彼らに頼んでも、「他所の土地を護っている間に、我が領地に敵兵が攻め込んで来たらどうなるのだ！」と言われてしまう。

義勇兵も自分の家族を護りたいのが本音なので、上層部を説得してこちらに来てくれそうな者はいない。侵入されていない東部や北部の義勇兵が来てくれれば内陸はどうにかなるが、船を出せる訳ではない。やはりサザンイーストン騎士団が海上封鎖に非協力的なのが痛い。レスター団長は怒りのあまり、拳を地図に打ち付けた。

「こんな時にルーベンス様がいらしてくださったら……」

あの気障なグレンジャー団長を言い負かすことができない自分の不甲斐なさに、レスター団長が大きな溜め息をついた時、サイラスが守護魔法使いの帰還を知らせに来た。

「ウィニーがルーベンス様とフィン君を連れて帰ってきます。パックのゼファーがそう教えてくれました」

カザフ王国の侵入から激務続きで心身共に疲れていたレスター団長だったが、その知らせを聞いて、十代の若者のような素早さで庭まで駆けて行った。

ベントレーの領主館は、サリヴァンで贅沢三昧している貴族のもののような豪華な造りではなく、昔ながらの無骨な防衛拠点としての役割に特化していた。

普段の生活には不便な堀や、吊橋なども今回は大活躍しており、日頃は無用な広い屋敷や納屋も、村人や近隣の負傷人などの受け入れに使われていた。勿論、そこにウェストン

騎士団も駐屯している。
堀の内側には、騎士団が整列できるほど大きい庭がある。ウィニーはその真ん中に舞い降りた。
「ルーベンス様！」
レスター団長と共に、ベントレー卿も庭に駆けつける。
「カザフ王国の侵入はどうなっておる！」
ウィニーから飛び降りながら、ルーベンスが吠えた。
「あちらで説明いたします」と答えたレスター団長とベントレー卿に続いて、ルーベンスは屋敷内に消えた。
守護魔法使いの帰還に、ウェストン騎士団や義勇兵達から歓声が上がった。

三　ベントレー屋敷で

師匠が屋敷に入っていくのを見届けたフィンは、ウィニーから降りて鞍を外してやる。
『無理させたね。疲れただろう』
『きゅるるるるん』

甘えて頭を押し付けてくるウィニーを撫でていると、親友のパックが飛びついて来た。
「フィン！」
ゼファーを肩に乗せたパックの無事な姿に、フィンはホッと胸を撫で下ろす。ウェストン騎士団が駐屯していると聞いていたので、大丈夫だろうとは思っていたが、やはり実際に見るまでは心配だったのだ。
「良かった！　ロイマールで戦争が勃発したと聞いた時から心配していたんだよ。でも、目のクマ凄いね」
そう言われてパックは苦笑いする。鏡を見る暇もないので、自分では気づけないのだ。
「フィン、こちらが兄のサイラス」
兄のサイラスを紹介するが、その顔のクマを見て、自分も酷い有り様なんだろうなぁと肩を竦めた。
パックによく似た赤毛のサイラスに、フィンは微笑んで手を差し出す。
「パックには入学した時からお世話になっています」
上級魔法使いの弟子と握手しながら、サイラスはこれで何もかも大丈夫！　という安心感がこみ上げてきた。
「ウィニーの世話はパックに任せて、フィン君はルーベンス様のお側に行った方が良い」
「そうだよ！　ウィニーの世話はちゃんとするから、フィンはルーベンス様の側に

行って」
二人は、父親のベントレー卿から、ウェストン騎士団とサザンイーストン騎士団の連携が上手くいっていないのを聞いていた。これから軍略会議が開かれるなら、上級魔法使いの弟子であるフィンもその場に同席するべきだと思ったのだ。
「じゃあパック、鞍を外した場所にブラシを掛けてやってね。それと……こんな時になんだけど、何か食べる物はない？　俺も師匠もあまり食べていないんだ」
帰国を急いでいたので、バルト王国の馬喰達と別れてからは、持っていたパンぐらいしか食べていなかった。親友の顔を見た途端、お腹が鳴ってフィンは空腹を思い出した。
「それは大変だったね！　ブラシ掛けは私がするから、兄さんはフィンに何か食べさせてやって」
祖国の危機なのに、腹が減ったなんて呑気だと思われないかとフィンは及び腰だったが、サイラスは快く台所まで案内した。ベントレーがウェストン騎士団の駐屯地になってから、騎士団や避難民に食事を提供していたので、すっかり慣れっこだったのだ。
「フィン！」
台所に入ったフィンに、見知った少女が声を掛けた。パックの妹のルーシーだ。
中央の貴族の娘は台所仕事などしないが、地方貴族の娘であるルーシーは、戦時下というのもあって駆り出されていた。

「ルーシー、手伝っているんだね」
　ルーシーはエプロン姿なのを少し恥ずかしく思いかけたが、フィンはそんなことを気にしないだろうと開き直って笑った。
「フィン君に何か食べさせてやってくれ」
「あっ、師匠にも何か食べさせないといけないんだよ。戦争勃発の知らせを聞いてから、全く食べ物を口にしていないんだ。本当は酒なんか飲ませたくないけど、今はワインとチーズだけでも口にしてもらわないと……」
　サイラスは、上級魔法使いの健康も大事だと頷き、召使いにワインやチーズなどを運ばせる。
　フィンは台所の横の大きな長テーブルで、ルーシーにシチューとパンを食べさせてもらった。
「すごくお腹が空いていたのね。シチューのお代わりを持って来るわ」
　ものも言わず一杯目のシチューを食べ終えたフィンに、ルーシーは呆れながらもお代わりをついでやる。
「ありがとう！　師匠も空腹だと思うんだけど、今は食べるどころの気分じゃないかも。でも、ちゃんと食べないといけないんだ」
　フィンだってカザフ王国が攻め込んで来たのに驚き、憤りを感じている。しかし、ルーベンスがまともに食べず、寝てもいないのが心配でならない。
「ワインとチーズとパンを持っていかせたから、きっとどれかは召し上がっているわ」
「ワインは飲むかもしれないけど、注意しなきゃ食べ物は口にしないんだ。ご馳走さま、美味しかったよ」
　素早く空腹を満たしたフィンは、ルーベンスに少しでも食べさせなきゃと立ち上がった。
「ルーシー、何か困ったことがあったら言ってね。俺にできることなら、手伝うから！」
　ウェストン騎士団に領民、避難民などの食事を用意するのは大変だろうと、フィンはルーシーを労った。
「大丈夫！　それより、カザフ王国の奴らをさっさと追い出して！」
「そうだね！」
　空から見た焼け焦げた畑を思い出し、フィンはルーベンスのもとへ向かった。

「ルーベンス様はこちらですか？」
　いつもは領主の部屋として使われているんだろうなと思いながら、フィンはある部屋の扉の前に立っている騎士に尋ねた。
「そうです」
　厳しい顔の騎士を見て、一瞬、部屋に入れてくれないかもとフィンは思ったが、スッと

扉を開けてくれた。どうやら、上級魔法使いの弟子として顔が知られてきているようだ。

窓の側に置いてある、大きな机の上に広げられた地図をルーベンス、レスター団長、ベントレー卿の三人が覗き込んでいた。

椅子にはルーベンスが座り、両脇にレスター団長とベントレー卿が立って説明している。

フィンは部屋の中を見回して、サイラスが召使いに運ばせた銀のお盆が、サイドテーブルに手つかずのまま放置されているのに気づいて、溜め息をつく。

「やっぱり、何も口にしていないんですね」

フィンは、話し合いに割り込んで銀のお盆を地図の上に置いた。

「何をするのじゃ！」

カザフ王国の侵入状況を聞いていたルーベンスがフィンを叱りつける。上級魔法使いの怒りの籠もった視線に、中級魔法使いでもあるベントレー卿は、グッと息が苦しくなった。

「戦況の把握も大事ですが、今は少しでも食べ物を口にしてください。師匠が倒れでもしたら、防衛魔法は維持できなくなるのですよ」

レスター団長は、重要な話し合いを銀のお盆で邪魔され腹を立てていたが、防衛魔法を維持できなくなると聞いて青ざめた。

「ルーベンス様、どうかお食べになってください！　海からの襲撃だけでも被害が甚大なのに、防衛魔法が消滅したら、シラス王国は滅亡してしまいます」

腹立たしい弟子を睨みつけていたルーベンスは、厳ついレスター団長に涙目で懇願されて、その鬱陶しさに負けた。

「お前という奴は……いつか沼の蛙に変えてやるからな！」

怒りながらも、ルーベンスがワインを飲み、チーズをほんの少しだけでも口にしたので、フィンはホッとする。

「沼の蛙になっても、俺は俺なんじゃないんですか？　姿変えの魔法を教えてくれた時に、本質は変わらないと言っていたじゃないですか？」

ワインを一気に飲み干したルーベンスは「ふん！」と鼻で笑った。

「まだまだお前の知らぬ魔法があるのじゃ。お前に教えたのは姿変えの魔法の初歩の初歩じゃ！」

「ええっ！　マジで？」

弟子の鼻をあかして、満足げにワインをもう一杯飲み干したルーベンスに、ベントレー卿は大人気ないと呆れながらも、やっと普段の余裕のある上級魔法使いに戻ったと安堵した。

「もう結構じゃ。フィン、下げなさい」

フィンとしてはもう少しチーズやクラッカーなどを食べて欲しかったが、これ以上は無理だと諦めて、地図の上から銀のお盆をどけてサイドテーブルに戻す。

「では、とんだ邪魔が入ったが、騎士団長、被害状況を説明してくれ。フィン、お前もそこで聞いておきなさい」

広げられた地図には、青いインクでカザフ王国の侵入箇所が示されていた。フィンは、想像以上に大規模な侵略だったのだと拳を握りしめる。

「海から入った後は、やはり川沿いに北上したのか？」

「ええ、カイル王子が派遣されていた旧ペイサンヌ王国の兵は船を操るのが得意ですからね。それと、海賊どもの略奪も横行しています」

ルーベンスが指差した先にはマーベリック城があった。

マーベリック城にカザフ王国の兵が迫っていると聞いて、フィンは気が気でない。そこにはフィンにとって大事な少女――フローレンスがいるのだ。

「師匠、マーベリック城は……！」

ルーベンスの青い眼に「黙っていろ！」と睨まれて、フィンは口を閉ざす。

「思ったよりも深く侵略されておるな！　じゃが、このままでは済まさぬぞ」

守護魔法使いの宣言を、レスター団長とベントレー卿は心強く感じた。

四　軍略会議の前に

レスター団長は、地図上のタドリス河を指揮棒で示しながら、カザフ王国の侵入経路を辿っていく。タドリス河は西部地域の大河であり、流通の要となっている。

「マーベリック城にはまだ到達していませんが、カザフ王国がここを拠点にしようとしているのは明らかです。ウェストン騎士団が、地元の義勇軍と協力して城の手前で防衛していますが、海岸線の警戒も必要なので、はっきり言って人員不足です」

ベントレー卿は、海岸線のパトロールを重要視していた。カザフ王国の兵だけでなく、この戦争に便乗した海賊の略奪も頻発していたので、本音を言えばマーベリック城の攻防戦に人員を割きたくない。

「東から兵が到着してからにしないと海岸線の警備が手薄になってしまいます」

ベントレー卿の発言をレスター団長はきっぱりと退ける。

「ですが、マーベリック城を占拠されたら、交通の要所を押さえられてしまい、西部一帯をカザフ王国に支配される危険があります。侵入した敵を素早く撃退するためには、拠点の占拠を許してはなりません」

脇で聞いているフィンは、この前マーベリック城で会ったばかりのフローレンスが心配で、気もそぞろになる。ルーシーのように台所を手伝っているぐらいならまだ安心だけど、ひょっとしたら負傷者の治療で魔力を使い過ぎて倒れているかもしれない……と妄想を暴走させる。

「師匠、俺はこれからマーベリック城に行ってきます！」

「馬鹿者！　マーベリック城はそんなに容易く陥ちたりはしない。それより、キャリガン王太子が来られたら軍略会議が開かれるに決まっている。それまでに、どのような状況なのかしっかりと把握しておくのが大切だ」

レスター団長とベントレー卿の考えを聞いた上で、上級魔法使いとして一番優先するべきことを選択しなくてはならないのだ。

フィンは深呼吸して、敵に攻められているマーベリック城の幻影を頭から消し去った。ルーベンスだって自分の実家を心配していない訳がないのに、平静にレスター騎士団長から状況の報告を受けているのだ。自分がとり乱すわけにはいかない。

「さて、内陸部まで侵略されているのは、タドリス河流域のみなのだな。後は、海岸で防衛しているのか？」

ルーベンスの質問に、二人は渋い顔をする。

「防衛できている所と、既に占拠されている場所とがあります。この地図でも何回も書き直していますが、占拠されている箇所にこちらが援軍を派遣すると、海へ逃げられてしまうのです」

レスター団長は、辛うじて冷静な口調を保っていたが、ベントレー卿は顔を真っ赤にして、これまでの不満をぶつけた。

「略奪し尽くしては海へ逃げ、そしてまた他の海岸を襲うのです！　我々は何度もサザンイーストン騎士団に海上封鎖を懇願したのですが、軍艦が足りないと拒否されました！」

レスター団長は、他の騎士団への非難になるので口にしなかったが、被害を受けている地区の領主であるベントレー卿は、容赦しなかった。

「サザンイーストン騎士団は、まだ攻撃もされていない王都サリヴァンの防衛を重視しているのですよ！　戦場は西部なのに！」

「ベントレー卿、被害を受けているそなたが怒るのは無理もないが、会議ではそういった発言は控えて欲しい。サザンイーストン騎士団の協力を取り付けなければ、カザフ王国の侵略は止められないのだぞ」

ルーベンスは、曲者のサザンイーストン騎士団のグレンジャー団長との軍略会議の前に、ベントレー卿に釘を刺しておく。

「それはわかっているのですが……」

ベントレー卿は、グッと拳を握りしめる。

ルーベンスには、王都の貴族達が大騒ぎしてサザンイーストン騎士団を引き留めている様子が目に浮かんだ。

大方「そなた達がいなくなったら、王都サリヴァンは誰が護るのだ！」などと言って泣きついているに違いない。

ヒラヒラしたレースの袖を振り回して、王宮に押し掛け、自分の屋敷と財産を護ってくれと騒ぎ立てているだろう愚かな貴族達を思うと、ルーベンスは吐き気がしそうになる。

「キャリガン王太子とグレンジャー騎士団長を迎えて軍略会議を開くとなれば、冷静さを保たなければ相手の思う壺に嵌るぞ」

レスター団長とベントレー卿は、ルーベンスの念押しに頷く。

馬鹿な貴族を護りたいとは思えないが、王都には多くの庶民や護る価値のある貴族もいる。それでなくとも、シラス王国の最重要拠点だ。サザンイーストン騎士団が全ての戦艦をサリヴァンの防衛から外すのが難しい事情も、ルーベンスは理解していた。

フィンも地図を見て、かなりの海岸が侵略されているのに怒りを覚えた。

初等科の時に、ルーベンスや幼いウィニーと旅した長閑な海岸を、カザフ王国の兵や海賊が荒らし回っている。

空から見た焼き討ちされた畑や家を思い出し、フィンは苛々と歩き回った。ジッとしていられない気分だったのだ。

「フィン、うるさい！　落ち着け！」

「落ち着きがない」と叱られるのは慣れっこのフィンだったが、その口調の余裕の無さに、ふと足を止めてルーベンスの顔を見る。

「師匠、軍略会議まで少しでも良いから、横になってください。キャリガン王太子とグレンジャー団長が来られたら、起こしますから」

元々、吟遊詩人の真似をしての旅行以外は塔に引き籠もっているのでルーベンスは色白だが、今は灰色がかっている。余りの顔色の悪さにフィンは驚き、休養が必要だと口にした。

「馬鹿者！　カザフ王国に攻め込まれているというのに、昼寝なんかしていられるか！」

上級魔法使いが怒鳴り、レスター団長とベントレー卿はビクッとしたが、フィンは引き下がらない。

「緊急事態だからこそ、休める時には休まなきゃいけないんです。師匠にもわかっているはずです。今は、キャリガン王太子達が到着するまで待っているだけなんだから、休んでください」

ルーベンスは反論されるのに慣れていない。歴代国王の命令を無視する程の不遜な態度を貫いてきた。皆ひと睨みすれば黙ったものだが、この弟子はそれをものともしない。

「お前は……」

ルーベンスの怒りの籠もった青い眼と、一歩も譲らないフィンの緑色の眼が火花を散らす。

中級魔法使いのベントレー卿は、背中に汗がにじんだ。魔法使いの素養のないレスター団長ですら、息苦しさを感じて咳払いする。

その咳払いで、二人の間の緊張が解けた。

「この頑固者め！　言い出したら聞かないな」

ルーベンスも自分が疲れ果てているのに気づいて、生意気な弟子の忠告に従うことにした。

ベントレー卿がアタフタと一番良い部屋を用意させようと召使い達に命じるのを、ルーベンスは片手で制して、部屋の長椅子に横たわる。

「私はここで構わん。フィン、キャリガン王太子が到着されたら、絶対に起こすのじゃぞ。起こさなかったら、沼でハエを食べる目に遭わせてやる」

悪態をつきながら目を瞑ったルーベンスに、フィンは関節炎、気管支炎の治療の技と共に、深く眠れるように心を落ち着かせる魔法を掛けた。

一瞬でルーベンスを深い眠りにつかせ、マントを掛けてやっているフィンを見て、二人はこれが次代の守護魔法使いの腕前なのだと感心して眺めていた。

「俺がここにいますから、なすべきことをしてください。あっ、お二人にもお昼寝をお勧

めしますよ。キャリガン王太子が到着されたら、起こして差し上げますので……」

二人とも疲れていたが、お昼寝をしている暇はないと苦笑して断ると、そっと部屋を出て行った。

「どうやら次の守護魔法使いは、ルーベンス様とはかなり違った感じになりそうですな」

レスター団長は、癖のある茶色の髪に緑色の目を輝かせ、雛竜をバスケットに入れて騎士団に初めて来た時の少年を思い出して、感慨に耽った。

「そうですね。でも、それはまだ先にして欲しいですね」

ベントレー卿は、息子と同い年のフィンは、魔力に不足はなくても、まだまだ学ぶことが多いだろうと笑った。

「勿論です！　ルーベンス様にはフィン君を一人前にしてもらわないといけませんからなぁ」

カザフ王国の侵略からこの方、二人は先のことまで考える余裕など持てない日々を過ごしていた。守護魔法使いが帰還し、その弟子までもが頼もしく成長しているということが、心にホッと明るい火を灯した。

「キャリガン王太子とグレンジャー団長が到着する前に、我々の意見を統一しておきましょう」

海岸線の防衛を重要視しているベントレー卿と、内陸部への侵攻を防ぐことが一番大事

だと考えているレスター団長は、二人で話し合うために他の部屋へ向かった。

五　軍略会議に暗雲が……

「フィン……」

フィンは床に座り込み、ルーベンスが眠っている長椅子にもたれて、うとうととしていたが、小声で呼びかけられハッと目を覚ました。

声のした方へ顔を向けると、そこには見慣れた友人が立っていた。

「あっ、ファビアン！　……ってことは、キャリガン王太子も到着されたんだね」

慌ててルーベンスを起こそうとするフィンを、ファビアンは制した。

「キャリガン王太子も長距離移動で疲れておられるし、私がグレンジャー団長を迎えに行っている間は休養させていた方が良いのではないか？」

「グレンジャー団長もファビアンが迎えに行くの？　もしかして、カザフ王国が攻めてきてから、ずっとグラウニーと連絡係をしているの？　グラウニーは疲れていない？　ファビアンも……」

ファビアンは、まず竜の心配をしたフィンに、竜馬鹿だなぁと苦笑する。

「グラウニーは、サリヴァンでバースに世話をしてもらったから大丈夫だよ。それに、グレンジャー団長はすぐ沖合いまで航行してきているから、そんなに負担にならないさ」

小声とはいえ二人がコソコソ話しているので、ルーベンスが目覚めた。

「フィン、キャリガン王太子が来られたら起こすようにと言ったのに……」

少し寝てサッパリするどころか、不機嫌そうに眉を顰めている。

「まだグレンジャー団長は到着されていないので、もう少し休んだらどうですか？　空きっ腹にワインを飲むから頭痛がするんですよ」

寝起きの機嫌が悪い師匠に、フィンは素早く頭痛止めの治療を施す。

サッと頭痛が消え失せたルーベンスは、フィンの治療の技は上級魔法使い並みだと思ったが、今はそんな褒め言葉を与えてやる気分ではなかった。

何でもないような顔をして、早速次の行動に移る。

「曲者のグレンジャー団長が到着する前に、キャリガン王太子と話し合おう。ファビアン、少し休んでから迎えに行きなさい」

ファビアンは、自分とグラウニーの心配をしたのか、それとも王太子と話し合う時間を稼ぎたいと考えての指示なのかわからなかったが、言われた通り少し休憩してからグレンジャー団長を迎えに行った。

いつも颯爽としているキャリガン王太子も、カザフ王国の侵略から眠れない日々を過ごしているらしく、目の下に黒いクマができていた。

ベントレー卿からお茶の接待を受けていた王太子は、ルーベンスが入室すると、傍目にもわかるほどの大きな息を吐いた。

「ルーベンス様、無事に帰国されて良かったです。バルト王国駐在のカンザス大使から、ロイマールに潜入されたと報告があがっていたので、心配していました」

キャリガン王太子との顔合わせは、サリン王国のチャールズ王子を救出に行く前の報告以来だった。

サリン王国から帰国した途端、ルーベンスが倒れたとの報告を受けて、マキシム王はサリヴァンで療養するように命を発したが、その時にはバルト王国へ飛んで行ってしまっていた。

いつもは温厚なキャリガン王太子だが、自分の健康も顧みないルーベンスの勝手な行動をチクリと皮肉った。

ルーベンスはいつも通り悪びれもせず、本題に入る。

「カンザス大使から報告を受けているなら、私が何を探ろうとしてロイマールへ向かったのかも察しているだろう。フレデリック王はもう長くない。この戦は、第三王子が後継者になろうとして起こしたものだ。王都の人々も、戦争勃発の知らせに驚いていた」

「まさか！　この戦争はフレデリック王が始めたのではないのですか？　確かに主力部隊は旧ペイサンヌ王国の兵士だと報告を受けてはいますが、海戦を得意としているからだとばかり考えていました」

キャリガン王太子は、後継者争いに巻き込まれたのだと知り、呆れ果てた。

「では、ロイマールからの援軍は来ないのでしょうか？」

本国から援軍が来ないのなら、望みが出てくると、キャリガン王太子はルーベンスに問いかける。

「それは何とも言えぬな。今回の侵略は第三王子カイルの勇み足だとしても、実際に戦果を挙げている。他の王子も加勢しないとは限らない」

「フレデリック王は、何故後継者を指名しなかったのでしょう。とんだ迷惑です！」

ルーベンスは、フレデリック王は猜疑心が強過ぎて、息子すらも信用できなかったのだろうと肩を竦めた。

「それより、サリヴァンの様子はどうですかな？　馬鹿な貴族どもが、港から襲撃を受けると言って怯えているのでは」

キャリガン王太子は、王宮に押しかけて図々しい嘆願をする貴族達を思い出し、眉を顰めた。

「あやつらの泣き言は父王が聞いてくださっています。そんなに戦が怖いのなら田舎に避

難するようにと勧めたら、今度は私がサリヴァンから追放する気だと騒ぎ立てたのですよ。手に負えません！」

先祖の功績だけで貴族と名乗っている馬鹿どもをまとめてサリヴァン湾に放り込みたいと、キャリガン王太子は腹を立てていたが、父王はもう少し穏当な処分を考えているようなので任せることにしたという。

「では、サザンイーストン騎士団との協調がとれていないのは、馬鹿な貴族達に根負けしたマキシム王が、王都サリヴァンを護るように命じたからではないのですな」

ルーベンスに鋭く切り込まれたキャリガン王太子は、素早く否定した。

「まさか、父王はそんな愚かな命令などされません。ただサリヴァンを無防備にはできないので、何隻かの軍艦は停泊していますが……」

ルーベンスも、海戦が得意な旧ペイサンヌ王国が敵の主力なので、海に面した王都サリヴァンが奇襲を受ける可能性も無視できないだろうと頷いた。

「では、何故、サザンイーストン騎士団は海上封鎖をしないのでしょう。海上封鎖さえしてくれれば、侵略している兵士達の退路を断てますし、補給も防げます」

キャリガン王太子と守護魔法使いのやり取りを黙って聞いていたベントレー卿が、我慢しきれずに憤懣を口にした。

キャリガン王太子がその質問に答える前に、別の声が割り込んだ。

「それは、西海岸全域を海上封鎖するだけの戦艦を、サザンイーストン騎士団が持ち合わせていないからですよ。遅れて申し訳ありません。しかし、我が騎士団の日頃からの要求を少しでも聞き入れてくださっていたら、このような非難を浴びることもなかったのでしょうに……」

戦争中だというのに、相変わらず黒のビロードのリボンで長髪を綺麗に束ねたグレンジャー団長が、華やかな雰囲気を振りまきながら部屋に入ってきた。

優雅に王太子にお辞儀をしているグレンジャー団長の後ろに、苦虫を噛み潰したような顔のレスター団長もいる。フィンは、これからの軍略会議が紛糾する予感がした。

六　海の上に防衛魔法を掛けます！

フィンだけでなく、ルーベンスもキャリガン王太子も危惧した通り、軍略会議は荒れた。

「私だって海上封鎖できるものならしたいです。しかし、現実問題として無理なのです。ですから、海戦に持ち込んでカザフ王国の戦艦を撃破していくしかないのです。あっ、そう言えば、ルーベンス様！　先程は空からの援護ありがとうございました。やはり、各軍艦に専任の魔法使いを配置するのが一番だと思いますね」

ルーベンスはベントレーへ向かう途中で、カザフ王国の戦艦に炎の矢を放ったのを思い出し、眉を顰めた。自国の戦艦を援護したのを後悔はしないが、それを例にとって、サザンイーストン騎士団に魔法使いを取り込もうとしているグレンジャー団長には賛成しかねる。

「魔法使いの参戦については、父王からも要請している。しかし、サザンイーストン騎士団ばかりに魔法使いを派遣する訳にはいかない。元々、サザンイーストン騎士団付きの魔法使いは、他の騎士団より多いはずだ」

今回のカザフ王国の侵入で一番死傷者を出しているウェストン騎士団のレスター団長は、キャリガン王太子の言葉に無言で頷く。

「被害を受けている西部の領主として発言させて頂きます。負傷者の救護や海岸線のパトロールにも、もっと大勢の魔法使いが必要なのです」

口が重いレスター団長の代わりに、ベントレー卿が主張する。

「それはわかっているが……」

「キャリガン王太子、今、何人ぐらいの魔法使いが集まっているのだ?」

キャリガン王太子の重い口ぶりで、ルーベンスは貴族出身の魔法使いが戦いに参加したがらないのだろうと察した。

「アシュレイ魔法学校の教授陣は全員協力を申し出てくれました。ただし、高齢の方は……失礼! ルーベンス様ほど健康でない方の参戦は遠慮して頂きましたが……」

百数十歳のルーベンス以上の高齢者はいないのだと、キャリガン王太子は自分の失言を取り消した。

「卒業生も多いはずだが……仕方ないのう」

フィンもアシュレイ魔法学校に入学してから、魔力には優れているが、贅沢な暮らしにしか興味がない貴族を何人も見てきたので、自分の領地が攻められない限り参戦しそうにないと肩を竦めた。

キャリガン王太子は、がっかりしているルーベンスに良い知らせを教える。

「生徒も協力を申し出てくれていますが、今は自分の家が戦闘地域にある者と高等科の生徒だけに絞っています」

確かに、パックなどは戦争に協力するしかない状況だ。

「中等科の生徒の中でも優れた魔法使いはいる。今は一人でも多くの協力が必要なのだ。魔力の使い過ぎなどの心配があるが、魔法学校の教授陣とコンビを組ませれば大丈夫であろう」

「それなら、もう少し人数が集まりますね」

少しでも隙があると、グレンジャー団長は自分の騎士団に有利な方向へと話を向ける。

「教授と在校生のコンビなら、各軍艦に魔法使いを配置できます」

その上、キャリガン王太子が反論する前に、もっと図々しい要求を突きつける。

「先程も感じたのですが、空からの援護はとても有効でありがたいです。現在、人を乗せて飛べる竜は、フィン君のウィニーとファビアン君のグラウニーですね。お二人と二頭に協力して頂ければ、カザフ王国の軍艦を撃破できるのですが」

「確か、ファビアンはノースフォーク騎士団に入団予定ではなかったか？」

キャリガン王太子が、瞳に怒りの稲妻を浮かべたルーベンスの代わりに、グレンジャー団長の要求を遠回しに断る。しかし、グレンジャー団長はその断り文句を逆手に取る。

「そうなのですよ！　ファビアン君はノースフォーク騎士団、そしてこちらの御子息であるパック君はウェストン騎士団に入団されるのですよね。我が騎士団だけ、竜持ちの魔法使いが入団しないのは、どういう訳かと前から不満に思っていたのです。あっ、フィン君、どうですか？　この前一緒に南の海を航海して、サザンイーストン騎士団の魅力を感じませんでしたか？　海は良いですよ」

ルーベンスは我慢強い方ではない。カザフ王国の侵略だけでも許しがたいのに、グレンジャー団長の勧誘など聞いていられないと怒鳴りかけた。

「グレンジャー団長、カザフ王国本国からの支援を妨害できれば、カザフ王国の軍艦を撃退することに集中できますよね。なら、俺が海岸線に防衛魔法を掛けて海上封鎖をします！」

立ち読みサンプル
はここまで

ルーベンスの堪忍袋の緒が切れる前に、フィンが重大発言をした。その場にいた、ルーベンスを除く全員が驚く。

「まさか、本当に！　海の上に防衛魔法が掛けられるのですか？　それは、もしかしてフィン君が……」

「キャリガン王太子!!」

キャリガン王太子は驚きのあまり、フィンがアシュレイの子孫だから海の上に防衛魔法を掛けられるのかと言葉を発しかけたが、ルーベンスから凶暴なまでの圧力を感じて口を閉ざす。

そんなやり取りを、グレンジャー団長は抜け目なく観察していた。

やはり、フィンがアシュレイの子孫だとの自説に間違いは無さそうだと、内心でほくそ笑む。だが、今はもっと重要な話がある。

「海の上に防衛魔法が掛けられるなら、フィン君の言う通り、海上封鎖の代わりになります。サリヴァンへのカザフ王国の奇襲を防げますし、退路を断つことにもなる。そうできれば、海岸線のパトロールの人員を、タドリス河を侵略しているカザフ王国軍の掃討に回せます。援軍が来なくなれば、敵の士気も下がるでしょう！」

領主の海岸線の防衛をして欲しいという望みと、マーベリック城の防衛という重要任務の優先順位に悩んでいたレスター団長は、期待に満ちた目でフィンとルーベンスを見つ